みんなが主役のまちづくり

まちづくり協議会に参加してみませんか

近年、「互いに助け合い協力する」という住民同士のつながりが、核家族化やライフスタイルの多様化などにより、希薄になっています。これらの課題を解決するため、市内の各地域ではさまざまな取り組みが行われています。安全・安心で心豊かな生活を実現するために、いまできることを考え、地域で行われている取り組みに参加してみませんか。

◎問い合わせ　コミュニティ課　☎23-7146

変化した地域社会

かつての日本では、家族と同じように地域の人との交流が当たり前のものでした。地域では、田植えや稲刈り、冠婚葬祭など、生活に密着した家族だけでは対処できない部分を、住民同士が助け合いながら、生活していました。

しかし、高度経済成長期以降、地方から都市部への人口流出が起こり、地方では人口減少による過疎化や少子高齢化が進展。この結果、地域の在り方が変化し、人と人との結びつきが薄れていきました。さらに、ライフスタイルの多様化や、情報通信機器の普及などによって、地域のつながりは一層希薄化。地域社会のかたちが変化してきていると言われています。

見直される地域の「絆」

そして今、変化した地域社会では、再び地域の繋がりを強めようという意識が高まっています。

阪神・淡路大震災や東日本大震災では、地域住民が避難の際に声を掛け合ったり、避難所の生活で助け合ったりする様子が報道されました。復興の過程で生まれた、思いやりや助け合いの精神は、地域の「絆」を再認識する機会となりました。

求められる「絆づくり」

近年、子どもを狙った犯罪や事故、高齢者の孤独死など、新たな問題が相次いで発生しています。これらの中には、地域の見守りで防ぐことが可能なものもあり、地域の役割の大切さを見直す切っ掛けにもなりました。

安全・安心で暮らしやすい環境は、行政の力だけで実現できるものではありません。このことから、住民同士が互いに助け合う「共助」を確かなものにするため、地域の「絆づくり」が求められています。

地域コミュニティの働き

同じ地域で生活する人の集まりが、地域社会、すなわち地域コミュニティです。地域コミュニティには、子どもや高齢者などの見守りや、災害が発生したときの避難所での助け合いなど、個人では対応しきれない課題を解決したり、民俗芸能などを地域で継承する活動を通して、世代間交流を図ったりする働きがあります。

市では、地域コミュニティの充実を目指して、協働のまちづくりを推進しています。その柱の一つが、地域住民や各種団体が主体となって活動する組織「まちづくり協議会（まち協）」です。

まちづくり協議会（まち協）

まち協は、地域の身近な課題を解決したり、将来あるべき姿を検討したりする住民自治組織。平成22年から各地区に設立され、自治公民館などから選出された委員や、公募による委員がさまざまな問題を解決しています。

自治公民館とともに、本市における住民を主体としたまちづくりの柱の一つが、「まち協」です。まちづくりに取り組むための権限や財源を持つまち協は、地域の特色や文化的な財産などを生かした事業に取り組んでいます。

まち協が目指すもの

まち協では、次の5つの目標を掲げ、住民自らができることを考え、役割に応じて活動しています。これらの目標を達成するため、一人一人の知恵と力を結集。地域の特色を生かしたまちづくりを進めています。

【まち協が目指す5つの目標】

- **地域の活性化**
- **教育文化活動の推進**
- **健康増進・地域福祉の推進**
- **防災・防犯など安全・安心なまちづくり**
- **地域環境整備の促進**

権限と財源を持つまち協

行政と協働しながら、さまざまな地域の課題の解決を図るまち協。市では、まち協が自立した活動ができるように「我がまち交付金」を交付。この交付金の一番の特徴は、地域で使い道を決めてもらうことにあります。

自分たちの判断と行動で、地域をよくしていくための取り組みが進められています。

【交付金の活用例】

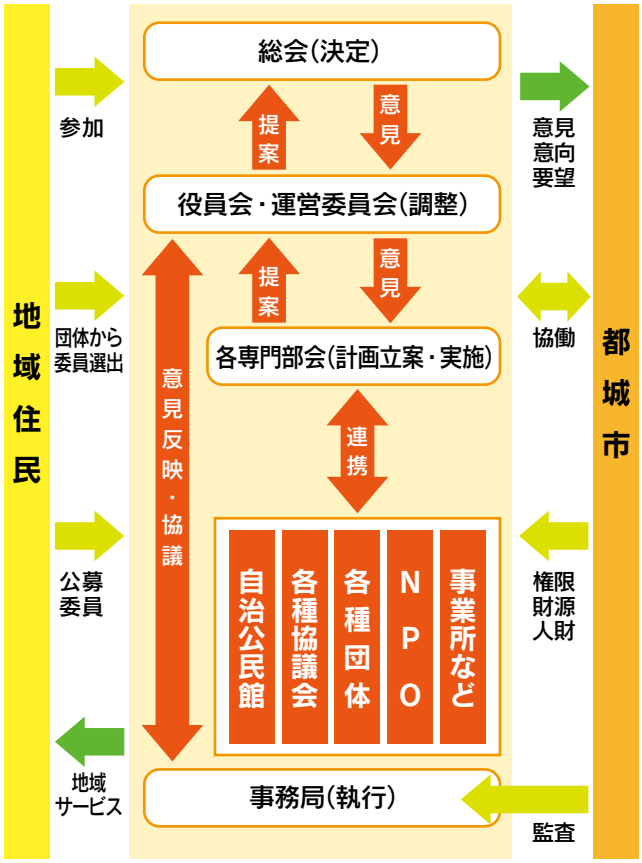
- **祭りなどのイベント開催**
- **ふるさと・防災マップの製作**
- **地域の活動施設の整備**

まち協と自治公民館

まち協と連携し、住民がまちづくりに参加するうえで、最も身近な場ともいえるのが自治公民館です。六月灯や十五夜などの行事、敬老会、健康づくり教室、子どもや老人の見守り活動などを行っています。

自治公民館は、まち協の活動の中核を担っています。地域の実情にあったまちづくりを進めるためにも、自治公民館に加入し、活動に参加してみませんか。

［まちづくり協議会の組織例］



「まち協」で取り組むこと

「まちづくり協議会」を核に、住民同士が協働して取り組むことで

◎地域の実情に合った「即効性のある活動」に着手できる
◎資源・特性を生かした「個性豊かな地域づくり」が可能になる
◎「地域の活性化と自立化」が実現する

市内15地区で活動するまち協

住民が主役となって、さまざまな地域の課題を解決するために活動しているまち協。現在、市内13地区で取り組みが進められていて、今月中には山之口地区と山田地区にもまち協が設立され、市内全ての地区で活動が本格化します。今回は、子どもたちも活動する祝吉地区と、3月に設立総会を控えている二つの地区のこれからの意気込みを紹介します。

子どもたちも、まちづくりに参加

「祝吉は、人が優しくて住みやすい地区。日頃から、みんなが自然にあいさつを交わしている」と祝吉地区まちづくり協議会の今村昇事務局長は、にこやかに話します。同協議会では、小・中学生もまちづくりに参画。児童や生徒らが委員として意見を述べたり、企画を検討する「子どもまちづくり協議会」が組織されています。

このほか、児童・生徒らは、毎年開催されている早水あやめまつりやウオーキング大会、文化祭などでも、大人たちとともに清掃や補助員などのボランティアとして参加しています。

自分たちにできることを考え、自発的に参加する子どもたち。2月に開催されたウオーキング大会では、まちづくりへの参加を呼び掛ける活動やイベントの運営補助、ごみ拾いなどを楽しみながら行いました。

祝吉地区まちづくり協議会
事務局長
今村 昇さん

同協議会の活動に、年に4・5回ほどボランティアとして参加している前田梨奈（りな）さん（祝吉中3年）。ボランティア活動を通して、自然と環境美化意識が身に付き「登校時にも友だちと一緒に、ごみを拾うこともある」と話します。

同地区では、子どもたちがまち協で活動することで、友だちや家族らの参加にもつながっていて、地域の「絆」がより強固なものとなっています。

大人だけではなく、子どもたちも一緒にまちづくりに参加する同協議会。子どもたちも巻き込んだ取り組みにより、笑顔と交流の輪が広がっています。

特色を生かした地域づくり

山之口地区には、重要無形民俗文化財に指定されている「山之口麓文弥節人形浄瑠璃」や文化庁選択・県指定無形民俗文化財の「山之口弥五郎どん祭り」、県指定無形民俗文化財「花木あげ馬まつり」など、数多くの特色ある文化遺産が受け継がれています。

しかし、地区の高齢化率は約35パーセントとなっていて、超高齢社会を迎えています。また、少子化も進んでいて、地区内にある小・中学校の児童・生徒数は年々減少しています。

この他、核家族化や地域の連帯感が希薄化したことにより、さまざまな課題がみられ、既存団体の活動継続が難しくなっていて、新たな取り組みをすることが困難な状況です。

そこで、ピンチをチャンスに変え、住みよい地域づくりを進めるために同地区では、今月、山之口まちづくり協議会を設立します。

同協議会設立検討会議の下西勝彦議長は「地域に住むみんなの知恵と力を集結し、特色を生かしたまちづくりに取り組みたい。地域密着型で住民主体の地域コミュニティ組織として、一体感を大切にしながら、多くの人たちに山之口まち協に参加してもらいたい」と力を込めます。

「快適で活力あふれるまち、安心なまち、豊かな文化のまちを目指して、地域の活性化や健康増進、伝統文化の継承と振興などの取り組みを進めていきたい」と意気込みを見せていました。

山之口地区まちづくり協議会
設立検討会議議長
下西 勝彦さん

地域のつながりを取り戻したい

山田地区は、旧山田町時代に「スポーツ振興で連帯意識を高めよう」をスローガンに掲げ、公民館対抗バレーボールやソフトボール大会などを盛んに開催している地区です。また、島津発祥の地ともいわれる「薩摩迫（さつまざこ）」などの史跡や、瀬茅俵（せがや）踊りなどの民俗芸能が伝承されています。

しかし、人口減少と高齢化に伴い担い手が不足。これらの資源を十分に生かしきれていない状況となっています。現在、山田地区は、合併以降毎年100人ずつ人口が減っていて、高齢化率は35パーセントを超えています。

同地区では、このような状況を一人一人が共通の課題ととらえ、各団体が連携して課題に取り組むことで賑わいを取り戻そうと、今月、山田地区まちづくり協議会を設立します。

同協議会では、地域の担い手となる子どもたちが健やかに成長するための環境づくりに着目。子育て世代が、住みたいと思うまちづくりに取り組む計画です。

同協議会設立準備会の中島哲郎会長は「毎年約1万人が来場する山田地区を代表するイベント、かかし村まつりのような、誰でも参加でき、笑顔あふれるにぎやかなイベントなども企画していきたい。特定の人だけではなく、地区に住むみんなが一緒に考え、手を取り合いながら、昔からあった地域のつながりを取り戻したい」と意気込みを話していました。

山田地区まちづくり協議会
設立準備会長
中島 哲郎さん

地域の特色を生かしたまちづくり

まち協では、自分たちで何ができるのかを考え、知恵と力を結集し地域の特色を生かしたまちづくりを通して、住みよいまちづくりのために積極的に活動しています。
今回は、まち協の目ざす目標と併せて、各地区の取り組みを紹介します。

地域の活性化

【妻ケ丘地区まちづくり協議会】

40回目を迎えた「ふれあいまつり」では、子どもまちづくり協議会の子どもたち自身が手がけた「子ども広場コーナー」を初開設。来場した多くの子どもたちが詰め掛けました。

【祝吉地区まちづくり協議会】

「第20回早水あやめまつり」を昨年4月に開催し、約1万1、000人が来場。あやめ音頭総踊や、スケッチ大会などを楽しみました。

【〝住みよいまち沖水〟協議会】

昨年11月に開催した70回目となる沖水地区大運動会。子どもから高齢者まで額に汗を浮かべながら競技に参加し、節目となる大会を盛り上げました。

【志和池地区まちづくり協議会】

昨年7月、地域の食材や料理をテーマに講演会を開催。地域内外から約170人が参加しました。また、11月には初の試みとして婚活イベントを開催するなど、新たな取り組みにもチャレンジしています。

【高崎地区まちづくり協議会】

結婚を取り持つ仲人を手本に、地区の独身者同士を結び付ける「高崎縁結び隊」を結成。一昨年に引き続き「たかざき恋物語」を開催し、8組のカップルが誕生しました。

教育文化活動の推進

【庄内地区まちづくり協議会】

地域の史跡などを巡る史跡学習会を、昨年5月に開催。庄内小学校の児童らに、地域の寺や神社にまつわる歴史などを説明しながら、一緒に散策しました。参加した児童らは、地域の歴史と文化に対する学びを深めながら、庄内地区の素晴らしさを再認識しました。

【五十市地区まちづくり協議会】

夏休み期間中、小学5年生を対象に「子ども料理教室」を開催。料理をつくることを通して、「食」への関心を高めるとともに、食べることの大切さを伝えました。

笑顔あふれる健康づくり

庄内地区まちづくり協議会
事務局長
朝倉 脩二（しゅうじ）さん

庄内地区まち協では、「みんなでつくる　住みよいまち　庄内」をモットーに、庄内地区スポ・レク大会やふるさと祭り、庄内川一周ＹＯＵ遊駅伝の三大イベントのほか、庄内中学校郷土学習などの事業を行っています。

２月からは、高齢者が転倒しにくく活動的に行動できることを目指した「こけないからだづくり体操」や屋内軽スポーツ「スカットボール」を全自治公民館で開催。

地域の人たちの健康維持と増進にも取り組んでいます。

健康増進・地域福祉の推進

【横市地区まちづくり協議会】

「横市の子どもの声を聞く会」を開催し、小・中学生が「将来の夢」などについて意見を発表。子どもらの声に、大人たちが耳を傾けました。

【西岳地区まちづくり協議会】

昨年、第1回ウオーキング大会を開催。大会終了後にはぜんざいを振る舞い、住民同士の交流を深めました。

【中郷地区まちづくり協議会】

住民の健康増進と地域名所の再認識を目的に「なかんごう史跡めぐりウオーキング」を開催。約60人が参加し、サシバ広場から金御岳山頂間を散策しました。

地域環境整備の推進

【小松原地区まちづくり協議会】

収納倉庫の老朽化に伴い、住民が協力して解体や撤去、新倉庫への建て替えを行いました。

【姫城地区まちづくり協議会】

姫城川をきれいにしようと、都城淡水漁業協同組合の協力のもと、川沿いの自治公民館も協力して「姫城川クリーン作戦」を行いました。

自覚をもってみんなで参加

志和池地区まちづくり協議会
事務局長

東郷 泰公（やすひろ）さん

志和池地区まち協では、「自覚をもってみんなで参加」をモットーに、花いっぱい運動や危険箇所注意看板の設置、子ども安全パトロールなどを行っています。

毎年2月に開催される南九州駅伝では、選手たちに気持ちよく走ってもらえるように、地区内のコース周辺をみんなで清掃しています。70回の節目を迎えた今年は、郷土芸能「はまご太鼓」も披露。選手の皆さんに元気を送りました。

「志和池に生まれ育って良かった」と思ってもらえる取り組みを進めています。

高城地区まちづくり協議会が発足

昨年12月3日に設立総会を開催し、高城地区まちづくり協議会が発足しました。「おっ！ 高城 元気いいじゃん」を全体スローガンに掲げ、各団体が連携してまちづくりに取り組んでいきます。

設立初年度となる平成28年度は、地域の安全と、安心して暮らせるために、防災講演会や、救急救命訓練などの開催を検討しています。そのほか、部会ごとに特色のある事業を検討し、高城地区ならではの取り組みも進めていきます。

特集を終えて

地域活動やボランティアは、これまで参加するばかりで、活動によって生まれる効果について考えることはありませんでした。

今回、特集の取材で話を伺ったまち協では、参加する皆さんが、活動前の血圧測定のときから、お互いに大きな声であいさつを交わし、運動に利用する椅子が足りないときは、動ける人が進んで取りに行くなど、他の人を気遣っていました。また、軽スポーツを楽しむ場面では、高い得点が出ると、童心に帰って手をたたきながら喜ぶ参加者の姿が、印象に残っています。

そして、取材を終え、公民館の外に出ると、屋外にまで歓声や笑い声が響いていました。このとき、話を聞いた地域には、いきいきと元気に暮らせる環境ができていると認識させられました。

今回の特集を通して、まち協の取り組みは、住民の笑顔を生み、元気に暮らすための環境を創出するものだと改めて実感しました。皆さんも、住民一人一人が暮らしやすいまちをつくるため、まずは、まち協や自治公民館など、地域の活動に参加し、できることから取り組んでみませんか。